

表現力育成につながる中学校語彙学習の研究

江口 恵子

九州女子大学人間科学部心理・文化学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年11月6日受付、2024年1月10日受理)

要 旨

本研究では、表現力育成につながる語彙学習について、中学3年生を対象とした実践で得られた結果をもとに、有効性を考察した。用いた方略は2つある。1つ目は、適語を使う目的で語彙について学習し、学習した事柄や語彙カードを活用して、表現上の課題解決を図ること、2つ目は、語彙学習の前後に、自分の語彙や語彙使用に関する省察活動を位置づけることである。これらの方略に基づいた学習指導過程がどう作用し、学習者には語彙学習に必要な力としてどのような認識が高まったのか、各段階における自己評価や振り返りの記述をもとに考察した。その結果、学習者は、語彙を探すことや増やすこと、使うことなどについて気づきを得ること、語彙や語彙使用に関して自覚を高め得ることがうかがえた。また、語彙力の育成には、適語選択への課題意識が重要であることも確認できた。ただし、これらの成果は一実践における成果であることから、一般化に向けては、実践研究の蓄積を通して検討を加える必要がある。

1. 問題の所在

国際化・情報化の進む現代社会において、自らの考えを形成して、的確に表現する力、いわゆる「表現力」の育成はますます重要になっている。その表現力を支える言語能力の一つに「語彙力」がある。児童生徒が学校教育の中で指導されて習得する語彙には限りがある一方で、語彙は60歳頃まで増え続けるとも言われる(三宮、2018)¹⁾。そのため、特に義務教育の最終段階にある中学校においては、語彙を習得させるだけでなく、生涯にわたって自ら語彙を学んでいく能力(本稿では「語彙学習力」とする)を育成することが求められる。

また、平成29・30年告示の学習指導要領では、国語科改訂のポイントとして「語彙指導の改善・充実」が挙げられている。語彙指導は国語の基礎的な能力を育成するものとしてこれまでも重視されてきたが、「中学校学習指導要領国語編」では、語彙指導の方向性について述べ、理解語彙の拡充に留まらず使用語彙を拡充していくこと、語句の意味や使い方に関する認識を深めていくことを求めている。

国語科における語彙指導は、特設の学習機会に語彙の特徴を体系的に学ぶ「取り立て指導」と、「読むこと」「書くこと」などの学習の中で必要に応じて語句を学ぶ「取り上げ指導」に分けられる。取り立て指導については、体系的な知識の教え込みに終始し、語句の意味や使い方に関する認識が十分に深められていないといった問題点が挙げられ、取り上げ指導については、「読むこと」の学習を通して語句の意味を理解させるぐらいで、使用語彙として語句の習得が図れていないといった問題点が挙げられる。

一方、語彙に関する研究は、国語学、教育学など様々な分野からアプローチされている。鈴木(2018)²⁾は「今後10年は国語教育を中心とした学校教育において、語彙という観点が底流に存在することになる。」と指摘している。そこで、本稿では語彙についての研究成果を踏まえつつ、表現力育成につながる中学校語彙学習について検討する。

2 語彙とコミュニケーション

日本人が持つ語彙数がどの程度あるのかは正確にはわかっていないが、いくつかの研究によっておおよその数がわかってきた。佐藤ら(2017)³⁾は、語彙サイズテストによって大学生の入学時の理解語彙数を4万前後と推定している。また、田中ら(2012)⁴⁾の研究によって、約1万語で日本語書き言葉の90%がカバーできることが示されており、図書館に所蔵されている書籍の語彙カバー率も同様である。使用語彙については、理解語彙より少ないことは知られているが、どの程度の語彙数かは明確ではない。荒巻ら(2011)⁵⁾によれば、ウェブ上のオンライン・コミュニケーションである「ツイッター」(現在の「エックス」)を10万

人規模で分析した結果、平均で8千語の語彙が用いられていると述べている。これは、ツイッターレベルの日常言語においては、8千語程度でコミュニケーションがなされていることを意味している。つまり、これらの研究成果から、日常的コミュニケーションによってはおよそ1万語弱の語彙が獲得され、だいたいの意味を理解するにはその数であまり支障がないことがわかる。それでは、何が問題か。

文化審議会国語分科会では、「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」（2018）という報告を出した。そこでは、これからの時代のコミュニケーションに必要な考え方として、次の6つを挙げている。

- ◇多様性を前提として、互いに歩み寄るよう努める
- ◇人の言葉遣いは寛容に受け止め、自身は適切な言葉を使うよう努める
- ◇敬語を適切に用いるとともに、親しさを示す言葉遣いも意識する
- ◇語彙を幅広く身に付け使いこなす
- ◇情報化によって発展してきた伝え合いの手段や媒体の特性を意識する
- ◇言葉による伝え合いの重要性を見直す （傍線は江口）

6つの項目の内、4つは「努める」や「意識する」という情意に関する言葉遣いであるが、語彙については「身に付け使いこなす」という能力を示している。これは、人間関係形成能力の一端を語彙能力が担っていることの表れである。そこで、「語彙を身に付け使いこなす」ことについての記述を以下に一部抜粋して引用する。

- ◇語彙を身に付けることが分かり合うことを助ける

望ましい伝え合いのためには、必要な言葉を身に付けることが欠かせない。コミュニケーションがうまくいくかどうかは、伝え合う内容が複雑になればなるほど、お互いの持っている語彙に影響される。読んだり聞いたりするものを理解するための語彙と、内容を正確に伝え、分かりやすくかつふさわしく言い換えて表現するための語彙とを幅広く身に付けたい。 （傍線は江口）

語彙の広がりによって、他者とのコミュニケーションが広がり、豊かに日常生活を送ることができる。つまり、およそその理解には1万語で事足りはするものの、それは十分な理解語彙があつてのことであり、さらにより多くの使用語彙があることで、普段の生活にも生かされていく。多くの理解語彙によって、その場の状況や相手に対して最もふさわしい言葉を選択的に使用することができるのである。

3 学習指導要領における語彙指導

学習指導要領の国語科では、「主体的・対話的で深い学びの充実に向けた授業改善」（総則）に向けて、「発達の段階に応じた、語彙の確実な習得、意見と根拠、具体と抽象を押さえて考えるなど情報を正確に理解し適切に表現する力の育成」（「改訂の要点」）が求められている。

「知識及び技能」としての語彙の学習をそれだけ独立したものとして切り離して考えるわけにはいかない。「話や文章の中で使うことを通して語感を磨き語彙を豊かにする」とされていることも含めて、正しく学習指導要領のめざしたところを読み込むには、「思考力・判断力・表現力等」との関連づけを十分に意識しておく必要がある。

このように、語彙指導は言語活動の基盤であり、指導者は学習指導要領で取り立てられた部分だけに表面的に従って指導していればよいというわけではない。そもそも、語彙という性格上、その指導では、相互の関連づけを考える必要性が特に高い。例えば「辞書的・文脈的意味」は、中1で挙げられているが、そこで扱えばよいというものではない。小学校の国語辞典の学習に伴って学ぶべきことでもある。日常の学習でも国語辞典を活用すべきだし、そこでは必ずこうした意味の解釈は問題になる。

一般に、語彙を身に付けるには、まず「接触」が必要である。その上で、「理解語彙」（理解の段階でとどまっている語の集合）から「使用語彙」（使う語の集合）にしていく必要がある。

ただし、実は「使用語彙」の中にも、自在に使えるものから、なかなか思いつかないものや、使い方が十分に理解できていないものまで、連続性がある。また、中には汚い言葉や古くなった言葉など「わかるし使えもするが、あえて使わない」という語もある。そうしたことをふまえて、森山卓郎（2019）⁷⁾は、使用語彙・理解語彙について次のように整理している。

- A 完全使用語彙（自在に使う、語感がわかる）
- B 完全理解・不使用語彙（古い語、汚い語など）
- C 完全理解・不完全使用語彙（想起・使用に問題）
- D 不完全理解語彙（意味曖昧「何となくわかる」）

教育的には、Dのレベルの語をCのレベルへ、そして、Aのレベルへと引き上げていくことが必要である。このように、語彙指導は単なる「知っている語の量」の問題ではなく、「適切に使えるようになっていく語の質と量」の問題として考えるべきことになる。指導も評価もこの観点を重視すべきである。

さらに、「理解以前」の語についても、だいたいの意味を予測することや、言葉の意味を調べることなどが重要になる。漢字の意味や語構成の知識などは、そうした場合に有益であろう。語彙力とは、単に「今使える・知っている」ということが大切なのではなく、「語彙を豊かにしていける力」としても把握すべきなのである。

- こうしたことを踏まえて、森山は、「語彙力の中に、
- E 未知語予測力（未知語の意味や表記を予想する力）
 - F 未知語調査力（辞典などで調べる力とその態度）

なども入れて考えておくとよいと言える。」と述べている。新しい言葉を学ぼうとする態度、学んだ言葉を覚えようとする態度、わからない言葉を調べようとする態度—こうした態度を形成しておくことで、言葉の学び深め（語彙学習）は生涯続くものになるのである。

4 語彙学習の在り方に関する先行研究の検討

体系的な語彙学習の立場からは、宮島（1978）⁸⁾が、語彙論の知識は単語の学び方も学ぶという点で本人の学習に役立つとし、語彙学習力との関わりに言及した。ただ従前の体系的な語彙学習は教師伝授型で、主体性を重視する語彙学習力の育成には繋がりにくい。この点に関して中村（2018）⁹⁾は、取り立て指導（体系的な語彙学習に相当）で組みやすい探究型の学習過程を例示した。その過程で言葉をどのように考えていけばよいのかという語彙を学習する力そのものを育成することが可能になると述べた。このように体系的な語彙学習においては語彙を対象化して扱うため、語彙とはどのようなものか、どう捉えるのかに関する認識は育ちやすい。一方で、なぜ学ぶのかという必要感は得にくい。当人が何らかの価値を感じることで学習意欲につながり、その価値の実現自体が学習の目的となるという鹿毛（2013）¹⁰⁾の知見に基づけば、語彙学習への目的性の面で弱さがある。

その点、使おうとする必然性のある機能的な語彙学習は目的的である。ただし、安居（1978）¹¹⁾が、文章の理解や表現で特定の語句を取り上げて行う学習は「語句」の指導であると述べたように、その学習は当該の文脈での適語が見つければ学習者の課題は解決するため、それ以上の「語彙」の学習には発展しにくい。機能的な語彙学習は個別性、一回性ゆえに、汎用的な語彙学習力の育成において弱さがある。かつて井上（2001）¹²⁾は、語彙力の育成の観点から取り立て指導と取り上げ指導を統合する語彙指導理論の構築を求めた。ところが井上（2013）¹³⁾によれば、そうした議論は見られなくなったと言う。

ここまで見てきたように二つの語彙学習は、語彙学習力の育成の観点からは一長一短の特性を有する。すなわち、両者の補完的統合を改めて検討する必要がある。また、長谷川（1978）¹⁴⁾は、語彙意識が適語を探すときに働くという認識のもと、表現に際して意識的自覚的に語を探して一つの言い方をする、そうした態度と能力を育成すべきで、それには「書くこと」の中での指導を図るべきだと述べた。

これらを踏まえると、統合の方法として、作文に適語を使う目的で語彙について学習し、学習した事柄を活用して作文上の課題解決を図る語彙学習を設定することが考えられる。

5 語彙学習力の要素に関する先行研究の検討

もう一点検討しておきたいのが、語彙学習力の要素である。現状では定まった整理は見当たらない。そこで、「語彙論の知識」「辞書」や語彙操作力を充実・向上させる技能「語彙学習に取り組む姿勢、態度」を挙げた山本（2006）¹⁵⁾、語意識や語学習方略を検討した塚田（2020）¹⁶⁾、「自身の語彙使用の省察」を措定

した萩中 (2021)¹⁷⁾ の知見に基づき、萩中 (2022)¹⁸⁾ は次の五つを導出している。

- A 語彙の特質等の理解
- B 語彙の価値、語彙学習の意義
- C 語彙学習の方法知
- D 語彙に関する自己課題の自覚と展望
- E 語意識や語彙への知的好奇心

(下線は江口)

このうち「D 語彙に関する自己課題の自覚と展望」は、従来あまり取り上げられなかった。しかし、語彙学習は学習者の側に立って発想すべきという塚田 (2005)¹⁹⁾ の指摘や、中学生くらいからは面白いなどを超えて価値を認めたら自己責任で学習行動を管理するという速水 (2019)²⁰⁾ の知見を踏まえると、Dは育てたい要素である。そのために、学習指導過程の早い段階で、自分が書いた文章を対象に分析し、自分の語彙や語彙使用を省察させることが考えられる。その際、今、この対象を表すのにどの語句を選べばよいかという1回きりの課題だけでなく、今後、このような対象を表すにはどのように語句を選んでいけばよいかという、時も場も超えた広い自己課題をもたせることも重要になると考える。

6 研究の目的

以上のことから、表現力を育成する語彙学習のためには、適語を使う目的で語彙について学習し、学習した事柄を活用して表現上の課題解決を図ることと、自分の語彙や語彙使用に関する省察活動を重視することの2点を保障する必要があることを確認できた。そこで、本実践ではこれらを踏まえ、読書活動における語彙カードの活用を通して、語彙学習を以下の方略①②に基づいて設定し、その効果について検討する。これによって、語彙学習力育成のための学習指導の在り方と、それによって高められる語彙学習力について示唆を得ることが、本研究の目的である。

方略① 適語を使う目的で語彙について学習し、学習した事柄や語彙カードを活用して、表現上の課題解決を図る。

方略② 語彙学習の前後に、自分の語彙や語彙使用に関する省察活動を位置づける。

7. 実践の方法

7.1 対象学習者とその実態

福岡県古賀市立中学校第3学年生徒

【図1】令和4年4月の標準学力分析検査の結果「ことば力」に関する資料を分析すると、B(L)「教科書内容の理解に相当の努力を要する」31.1%、C「教科書内容の理解に苦勞する」7.3%と、学年の4割もの生徒に語彙力に課題があった。

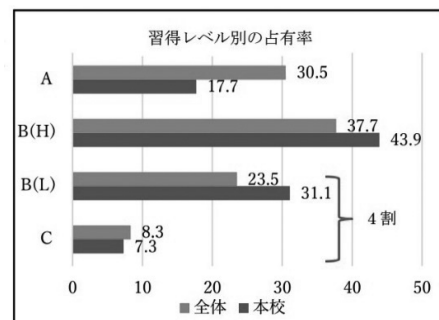
【表1】は、5月中旬に第3学年を対象に行った語彙テストの結果の一部である。約5割以上の生徒が正しい意味を捉えていないことが分かった。

【表1】語彙テストの一部「二の足を踏む」(5月)

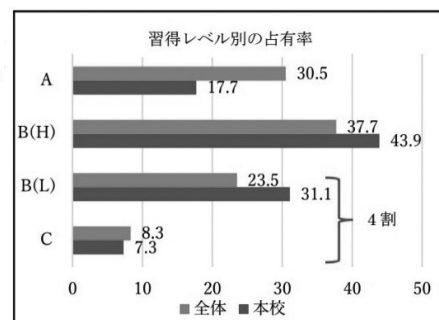
◎ ためらう。しりごみする。	49.1%	} 5割以上
今に満足せず、次のことに取り掛かること。	28.3%	
しっかり用心すること。	18.9%	
間違いないようにする。はっきりさせる。	3.8%	

調査の結果においても、「思考力、判断力、表現力等」において、「B書くこと」の平均正答率が全国(公立)46.5%、福岡県49.7%に対して、対象校44.5%と、自分の考えが伝わる文章を書くことに課題があった。

また、生徒のアンケートによると、作文などを書くことに約3割の生徒が苦手意識をもっていることが分かった。なお、苦手意



【図1】標準学力分析結果の結果(4月)



【図2】全国学力・学習状況調査結果(6月)

識をもつ理由として、①「言葉が浮かばない」35%、②「よい表現ができない」28%、③「構成を工夫できない」20%、④「根拠を示すことができない」17%であり、①②が6割を超えていた。

7.2 予備実践

予備実践「四字熟語」「慣用句」「漢語・和語・外来語」「語彙を豊かに」、日常の実践「新聞コラム欄の視写」を通して、語彙を多く収集し、使いこなす場を設定し、調べ学習など主体的な学びから、語の理解と増加を図る。その過程において【図3】のような語彙カードを適宜作成する。「語彙カード」の項目の例は、「基本の項目」（出合った言葉、言葉の意味、例文）と「各自の工夫で追加する項目」（書き留めた日付、出合った場面や出典、類義語・対義語）である。



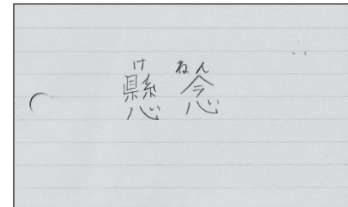
【図3】作成した語彙カード

7.2.1 予備実践① 語彙を理解するための学習過程の設定

第3学年の語彙における指導事項に基づき、四字熟語や慣用句について理解を深めることや、漢語・和語・外来語を使い分けられるように習得する。意味や語源を調べたり、それらの語句を使用した作文を書いたり、課題に取り組んだりする。

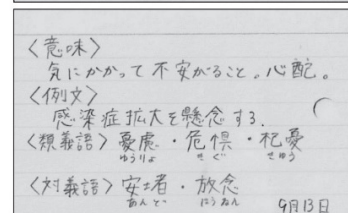
7.2.2 予備実践② 教科書（三省堂）「語彙を豊かに」の活用

様々なテーマで教材に関連した語彙が取り上げられている項目を使用して、辞書で調べたり短文を作ったりする。



7.2.3 日常の実践 新聞のコラム欄の視写

新聞のコラム欄を視写することで、語彙を増やし、文章の組み立てや様々な表現方法を学ぶ。視写だけでなく、意味調べ、短文作り、感想または意見文の内容についての調べ学習も行う。



【図4】語彙カードの一部

7.3.1 実践1 「読書活動 ブックトーク」

単元計画（5時間）

段階	時	学習活動・内容	語彙カードの活用
導入	1	1 学習課題を確認する。 単元を貫く問い 2年3組の後輩たちに、朝読書を待ち遠しくさせる本を紹介しよう。 ・おもしろさを伝えること ・読んでみたいと思わせること ・語彙カードを活用してシナリオ作りをすること	【インプット】 ブックトークを聞いて、本のよさが伝わる語句を「語彙カード」に書き留める。
		2 ブックトークの手法を知る。 (1)司書によるブックトークを聞いて、ポイントを押さえる。 3 ブックトークのテーマと紹介する本を決める。 (1)テーマの決め方を理解する。 ・聞き手の興味や関心・季節や行事 ・話題、ジャンル、著者に関するもの (2)本の選び方を理解する。 ・語り手が好きな本・聞き手が利用できる本	
展開1	2	4 構成を工夫してシナリオを作る。 (1)本の紹介の仕方を理解する。 ・ストーリー性 ・山場 ・つながり (2)グループで紹介の順番や方法、複数の本をつなぐストーリーを考える。 (3)シナリオをもとに練習する。	【アウトプット】 ストックした「語彙カード」を活用してシナリオを書く。

展開 2	1	5 リレーブックトークをする。 (1)ブックトークの仕方を理解する。 ・聞き手が親しみやすい表現 ・気持ちを込めた自然な話し方 ・聞き手の様子を見た話し方 (2)グループ順にブックトークを行う。 (3)聞き手は「印象に残った語句」と「感想」を学習プリントに記入する。	【インプット】 ブックトークを聞いて、本のよさや話し手の思いが伝わる語句、また使用したい語句を「語彙カード」に書き留める。
終末	1	6 振り返りをする。 (1)2年生は読んでみたい本を選ぶ。 (2)3年生は2年生からのブックトークの感想を読み、振り返りを行う。 (3)2年生が選んだベスト本を紹介する	【アウトプット】 どのような語句が印象に残るかを知り、「語彙カード」の活用を促す。

7. 3. 2 実践2 「読書活動 ポップ作り」

単元計画（4時間）

段階	時	学習活動・内容	語彙カードの活用
導入	1	1 学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 単元を貫く問い 読書が苦手な○○先生に、おすすめの本を紹介しよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・おもしろさを伝えること ・読んでみたいと思わせること ・効果的な語彙を活用してポップを作成すること 2 ポップの構成要素を知る。 (1)「走れメロス」のポップモデルを読み、構成要素を理解する。 ・本の題名と作者名・キャッチフレーズ ・推薦文・見やすいレイアウト・適切な絵や写真 (2)読み手を引きつけるフレーズの選び方やキャッチフレーズの条件を理解する。 ・短い言葉・意外性・感情に訴える・たくさんの意味を推論できる ・表現技法 3 推薦文、キャッチフレーズを考える。	【インプット】 おすすめの本の中で、情景や状況、作者の気持ちがよく伝わる表現を「語彙カード」に書き留める。
展開 1	2	4 前時の確認をする。 5 構成を工夫してポップの下書きをする。 ・タブレットを使用して作成	【アウトプット】 「語彙カード」を活用してポップを書く。
展開 2	1	6 グループで構成要素に沿って共同批正する。 ・書き換える箇所を具体的に指摘 ・言葉の洗練 ・書き換えた語句とその理由	【インプット】 友人のポップを見て、読み手を引きつける語句を「語彙カード」に書き留める。
終末	1	7 前時の確認をする。 8 ポップの清書をする。 (1)完成したポップの評価をもとに、読み手を意識した書き方を整理する。 (2)ターゲットである読書が苦手な先生が選んだベスト本を紹介する	【アウトプット】 どのような語句が印象に残るかを知り、「語彙カード」の活用を促す。

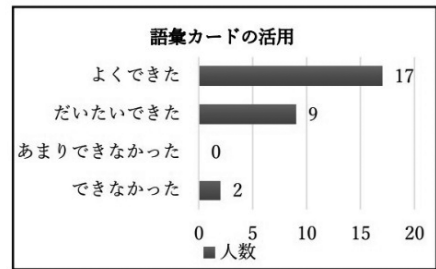
8. 実践の結果

8.1 実践1 「読書活動 ブックトーク」

(1) 導入の段階

【図5】は、ブックトークを聞いたときに「本の良さが伝わる語句を語彙カードに書き留めたか」についての自己評価である。33名中17名の生徒が「よくできた」と感じており、「興味を抱いた」「読みたくなる気持ちにさせる」という理由で、「どの世代にも称賛される作品です。」「最後にどんでん返しが起こる作品」などの語句を書き留め、今後の学習活動の参考になった。

しかし、「あまりできなかった」「できなかった」が10名いた。【図5】本の良さが伝わる語句の語彙カードへの記入



(2) 展開の段階

【表2】語彙カードを活用し、シナリオ作成に使用した語句

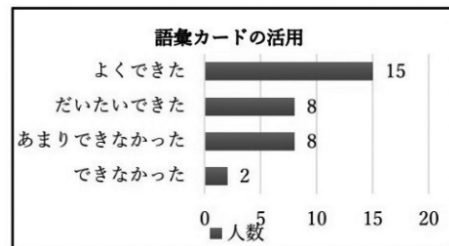
【表2】は、語彙カードを活用し、シナリオ作成に使用した語句の例である。

・涙腺がゆるくなる本を紹介します。
・無色透明な毎日・波瀾万丈な毎日
・主人公の危機、そこから起死回生していく。
・太宰と中也が切磋琢磨する姿はとても面白くかつこいいです。
・全てがつながっていく感覚は爽快。
・この本で一喜一憂できます。

また、【図6】は、「シナリオを作成したときにストックした語彙カードを

活用したか」についての自己評価である。15名の生徒が「よくできた」と感じていた。語彙カードに記した語句の中から、情景や状況、登場人物の気持ちにぴったりくるものを選び、シナリオに取り入れることで、具体的にかつ端的に表現することができた。

一方、「だいたいできた」と感じた生徒の中には、「自分の考えを表現したくても言葉が出てこないけれど、語彙カードの中にヒントとなる語句があった」「もっとカードを増やすことが大切だと思った」などと感想に書いていた。しかし、「できなかった」と感じた生徒の理由として「あてはまる語句がなかった」とあった。ここから、多くの語彙があると、自分の考えを表現する上で便利だと気づいたことが分かった。ただ、できなかった生徒には、シナリオに合う語句を提示し、語彙カードに書き留めさせるなどの手だても必要であった。

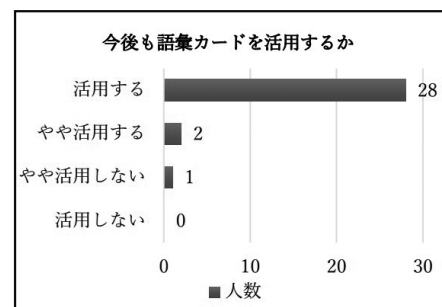


【図6】シナリオ作成時の語彙カードの活用

(3) 終末の段階

【図7】は、「リレーブックトークをしたときに、聞き手の手が印象に残った語句を知り、今後も語彙カードを活用していこうと思ったか」についての自己評価である。28名の生徒が「活用する」と思っており、「自分が語彙カードの中から使った語句を、2年生が印象に残った語句に書いていたので、うれしかった」などの感想が多くあった。2年生の感想は、聞き手側に的確にかつインパクトを与える表現とはどのようなものかを示す根拠となった。

これらのことから、2年生へブックトークをし、印象に残った語句を書かせたことは、豊かな表現につなげる上で有効であった。



【図7】今後も語彙カードを活用するか

8.2 実践2 「読書活動 ポップ作り」

(1) 導入の段階

まず、生徒はおすすめの本の中から、クライマックスとなる場面を探し、再度読み込んでいた。そこから、本の魅力が伝わる効果的な表現をマークし、語彙カードに書き留めていた。生徒は、実際には【図8】のとおり、作品の読みどころとなる場面で、情景や状況、登場人物の心情がよく分かる表現を引用した。一番に

効果的な表現を中心に置いたことは有効であった。

また、【図8】の下線部は、学習プリントを記入する際、語彙カードを活用しながら記入したものである。このことから、語彙カードの活用がほぼ定着していることが分かる。

情景や状況、登場人物の心情がよく分かる表現	その表現を選んだ理由
ここは、千の華に照らされた眠らない街	今まで感情を押し殺してきた主人公の心が大きく動いたことが分かるから。
自分も捨てたもんじゃないと思える。	自分のやるべきことが分からず途方に暮れていた主人公が、今すべきことが何なのか見え始めたから。
かつて世界にあった善悪の概念は通用しない。	突然、今までの正義や悪が自分のエゴになることの絶望感が伝わるから。

【図8】情景や状況、登場人物の心情がよく分かる表現をポップ作りに使用

(2) 展開の段階

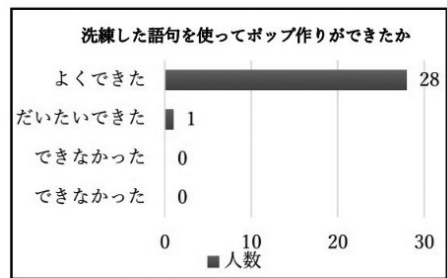
まず、構成を工夫してポップの下書きをさせた後、グループで構成要素に沿って共同批評をした。ここでは、書き換える箇所を具体的に指摘し合い、その後、【図9】のように、書き換えた語句とその理由を整理することで言葉を洗練させた。さらに、級友のポップを見て、読み手を引きつける語句を「語彙カード」に書き留めたり、書き換えた語句を追記したりすることで、効果的な語句の量を増やしていった。

ポップに載せたい表現	書き換えた表現	書き換えが必要な理由
果たしてクイーンは逆襲できるのか。	果たしてクイーンは獲物を盗み出すことができるのか。	「獲物」という言葉がより印象強く残り、どんな感じだろうと興味をもたせることができるから。
彼は彼女に出会うために生きてきた。	僕は彼女に出会うために生きてきた。	読み手が主人公と同じ気持ちになれるから。
1か月前前に起こった出来事	7週間前に起こった出来事	時間の経過が長く感じるから。

【図9】ポップに載せたい表現を書き換えたものをポップ作りに使用

(3) 終末の段階

タブレット(クロームブックの「ミライード」)を使用してのポップ作りは、書いたり消したり色を塗ったりという手間がなく、簡単に漢字や英語変換、レイアウトができるため、文章を書くことが苦手な生徒にとっては有効な手だてだった。【図10】は、「洗練した語句を使ってポップ作りができたか」についての自己評価である。28名の生徒が「よくできた」と感じており、り、振り返りでは「読んだことのない本を紹介するには、【図9】のような印象に残るフレーズを使うことが大切だということが分かった」という感想などがあり、この学習活動は有効であった。



【図10】洗練した語句を使ってポップ作りができたか

9 実践の考察

語彙を増やし、豊かな表現ができる生徒を育成するために取り組んだ、語彙カードを取り入れた表現活動の有効性について考察する。

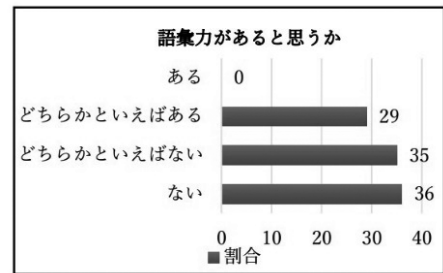
(1) アンケートの結果から

まず、語彙について、実践前から80.6%の生徒が「大事」、19.4%の生徒が「どちらかといえば大事」と答えており、語彙の大切さは認識している。

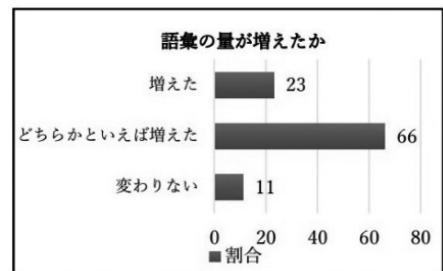
次に、語彙力が「ない」「どちらかといえばない」と答えた生徒が、実施前は【図11】のとおり71%いた。実施後は【図12】のように、語彙の量が、23%の生徒が「増えた」、66%の生徒が「どちらかといえば増えた」と感じている。

その理由として、1番目に挙げたのが「語彙カード」の活用である。「知らない語句を調べて、書き留めることで、意味や用例を理解することができたから」「スキマ時間にすぐに見返すことができたから」などの理由が多くあり、単語帳のように、いつでもどこでも手にとって、繰り返し目にする事ができる手軽さがよかったといえる。

次に、【図13】のように、「語彙力は身に付いたか」の問いに対して、21%の生徒が「身に付いた」、71%



【図11】5月生徒アンケート



【図12】12月生徒アンケート

の生徒が「どちらかといえば身に付いた」と感じている。このように感じる最も多い理由が「コミュニケーションの場」においてである。「『やばい』という一言で終わらせるのではなく、自分の思いを場所や相手に合わせて伝えるように言い換えると、トラブルが減ったから」「今までは親とよく口げんかをしていたが、親が言っていることが以前より理解できるようになって、最近はけんかが少なくなったから」という感想があった。

次に多かった理由が「学習の場」においてである。「作文を書くときにもっと分かりやすく伝える表現がないかを考え、書き換えるようになったから」「『釘を刺す』や『正々堂々』など以前は使わなかった四字熟語などを使う機会が増えたから」「説明の仕方が自分もだけど周囲の友達も上手になったと感じるから」という感想があった。

今後も、受験に向けて、作文や面接の取組として、語彙カードを活用しながら表現力を磨いていきたいと思っている生徒が、【図14】のとおり9割を超えた。「語彙が増え、使いこなせるようになった」「条件作文の点数が上がった」と実感している生徒の割合も大きく伸びたことから、語彙カードを取り入れた表現活動は有効であったといえる。

(2) 語彙テストの結果から

【表3】は、5月中旬と12月上旬に第3学年を対象に行った語彙テストの結果の比較である。同じ語句の意味を問うたときの正答率が、実施前よりも26%の大きな伸びが見られ、語彙力が実施前に比べて身に付いたといえる。

以上のように、語彙カードの枚数が増える＝自分の語彙が増えると視覚的に実感することができ、語彙に対する意識も高まった。また、グループで共同修正を行い、相手からの評価がある

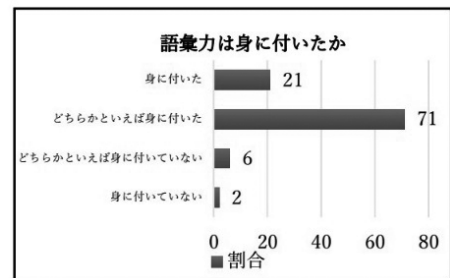
ことで、より語彙に広がりが見られるようになることも分かった。さらに、日常生活において、日々の日記や感想、生徒同士の会話の中で、相手に分かりやすく伝わりやすい語句に置き換えたり言い換えたりする生徒の姿が多く見られるようになった。また、文章を書くことが苦手だった生徒も、語彙カードを活用しながら意欲的に取り組む姿も見られた。

ただ、課題もある。まず、ストックした語彙カードが少なかったことである。量が多ければ、文章を書くときに、相手に分かりやすく伝わりやすい表現が見つかりやすく、表現にも幅が出る。また、カードをジャンル別に分類するとさらに使用しやすかった。語彙を増やしていくために、ストックした語彙カードを、年間あるいは3年間を通して活用し続けることを取組として位置付ける必要がある。また、豊かな表現力に結び付く「語感を磨く」については、まだ不十分である。「言葉」に対する感覚的なものをより意識的に言語化していく必要があると考える。

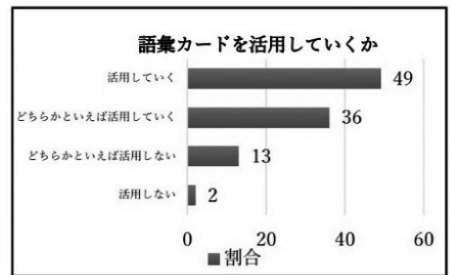
10 考察

10.1 適語を使う目的で語彙について学習し、学習した事柄や語彙カードを活用して、表現上の課題解決を図る(方略①) ことについて

実践1ブックトークのシナリオ作成、実践2ポップ作りの学習過程では、辞典で語彙を探したり意味を活用したりして、適語探索に意欲的に取り組む学習者の姿が観察された。こうした適語探索への意欲は、その後の語彙の使い分けに増加が見られたことや、語彙に関する記述例「言葉をふるいで選別していくイメージをもった」「何度も何度も繰り返し考えた」「この言葉でいいか自問して悩むことで達成感を味わった」などからもうかがうことができた。



【図13】語彙力は身に付いたか



【図14】語彙カードを活用していくか

【表3】実施前と実施後の比較

	5月	12月
たわいない		
◎ 手ごたえがない様子。	35.5%	61.5%
面白い様子。	48.4%	25.9%
しっかりしている様子。	9.7%	7.7%
力強く頼もしい様子。	6.5%	3.8%

では、学習者の語彙探索への意欲は、なぜ高まったのか。一つ目に考えられるのが、体系的な語彙学習の挿入によって、適語の存在への期待と使用への知的好奇心が高まったことである。特に実践2では、展開の段階で、各々が使用した語彙とは違う語彙を収集・分析したりして、共同で批正を行ったことによって、類義語の違いの捉えなどの知識を得た。その際、「こんなにあるのに使わないのはもったいない」「他の語彙も調べたい」といった語彙への知的好奇心のうかがえるものや、「無限にありそうな勢いで面白かった。その中にぴったりの言葉がありそう」という適語の存在への期待を書いたものがあった。こうした記述から、展開の段階で行った体系的な語彙学習が、適語への期待や知的好奇心を高め、適語探索への意欲を高めたものと推察される。

二つ目は、体系的な語彙学習の挿入によって、適語の探索や選択に必要な技能についての自信が得られる学習指導になったことである。先に挙げた共同批正では、グループでの活発な問答の後に、類語辞典を活用して、適語を提案した。この協働での学習を通して、体系的な語彙学習で獲得した技能や観点の活かし方が分かったことで、個々の表現に自信と見通しがもてたものと考えられる。これも適語探索への意欲喚起に作用した可能性がある。

10.2 語彙学習の前後に、自分の語彙や語彙使用に関する省察活動を位置づける（方略②）ことについて

本実践では、語彙使用の態度的側面を内省する学習者が多く認められた。これは、自己評価を通して位置づけた、省察活動が作用したのと考えられる。まず、生活ノートなどで自分がよく用いていた語彙をピックアップさせ、自身の使用語彙の現状を認識させた。その際、33名中18名が「同じ言葉ばかり使う」ことに気づいた。そのような傾向にある理由を問うと、「考えないで書く・使う」（8名）「言葉をあまり知らない」（7名）「ラクしたい・面倒」（3名）という実態を反映した率直な回答であった。ただ、語彙使用の背景にあるものについて考えたことは、自身を客観的に見つめる機会になり、語彙学習力の要素D「語彙に関する自己課題の自覚と展望」に該当する態度的側面への自覚を促すことになったものと思われる。

語彙に関する記述も、実践前は単に増やすことを望む姿（「語彙を増やしたい」15名）が多く見られたが、実践後は、「語彙を探せば、語彙が増える」「会話で増やしたり使ったりする」「増やしてその中から選びたい」など、語彙の増し方や増す方向に言及した記述も見られた。単元の早い段階で語彙に関する実状を自覚したことが、その後の語彙学習にも作用し、語彙量に関する課題と展望の深化にもつながったものと思われる。

11 まとめと今後の課題

本研究では、表現力育成につながる語彙学習について、中学3年生を対象とした実践で得られた結果をもとに、有効性を考察した。

本実践では、読書活動における語彙カードの活用を通して、より相手に分かりやすく伝わる豊かな表現を目指した。その結果、学習者は、語彙を探すことと増やすこと、使うことなどについて気づきを得ることができた。これは、挿入した体系的な語彙学習（語彙の多様性やその活用の仕方を習得させたこと）によって、学習者の語彙への期待や適語探索への自信が高まったためではないかと推察された。語彙学習力の育成には、適語選択への課題意識が重要であることも確かめられた。

また、学習指導過程の早い段階で、言語生活での自分の使用語彙を省察する活動を位置づけ、その上で語彙を探究させたりその学習成果を生かして推敲させたりした。これによって、学習者は語彙や語彙使用に関する態度的側面も含めた自覚を高め得ることがうかがえた。

設定した学習指導の有効性、その成果としての語彙学習力の具体的な内容は重要とは思われるが、一実践から得た示唆に過ぎない。一般化に向けては、実践研究の蓄積が必要である。

引用・参考文献

- 1) 三宮真智子(2018)『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める認知心理学が解き明かす効果的学習法』北大路書房
- 2) 鈴木一史(2018)「語彙学習の二側面」『月間国語教育研究』No.554.日本国語教育学会 p.4-9
- 3) 佐藤尚子、田島ますみ、橋本美香、松下達彦、笹尾洋介(2017)「使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発：50000語レベルまでの測定の試み」千葉大学国際教養学研究、15-25
- 4) 田中牧郎、相澤正夫、斉藤達哉、棚橋尚子、近藤明日子、河内昭造、鈴木一史、平山充子(2011)「言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用」特定領域研究『日本語コーパス』言語政策班報告書(JC-P-10-01)
- 5) 荒巻英治、増川佐知子、森田瑞樹、保田祥(2012)「日本人のオンライン・コミュニケーション上での平均使用語彙数は八〇〇〇語である」研究報告自然言語処理 (NL) NL-208/9) 1-8
- 6) 文化審議会国語分科会「分かり合うための言語コミュニケーション (報告)」(2018)http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401904.html
- 7) 森山卓郎(2019)「新学習指導要領における語彙指導 『活用的語彙力』をめざして」『教育科学 国語教育』No.830 明治図書 p.8-11
- 8) 宮島達夫(1978)「語い論を教える意味」『教育国語』54号、教育科学研究会国語部会、2-13
- 9) 中村和弘(2018)「語彙〈2〉」田近洵一・井上尚美・中村和弘編『国語教育指導用語辞典第五版』教育出版、p.24-25
- 10) 鹿毛雅治(2013)『学習意欲の理論－動機づけの教育心理学』金子書房
- 11) 安井聡子(1978)「語句指導から語彙指導へ (二)」『月間国語教育研究』No.70、日本国語教育学会、p.23-28
- 12) 井上一郎(2001)『語彙力の発達とその育成－国語科学習基本語彙選定の視座から』明治図書
- 13) 井上一郎(2013)「理解学習・表現学習の中での指導の内容と方法」全国大学国語教育学会編『国語科教育研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、p.317-324
- 14) 長谷川孝士(1978)「語句・語彙の指導」『月間国語教育研究』No.70日本国語教育学会、2-7
- 15) 山本建雄(2006)「語彙力」大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書、p.295
- 16) 塚田泰彦(2020)「語彙教育をどう展望するか」『第139回2020年秋期大会 (オンライン) 研究発表要旨集』全国大学国語教育学会、p.255-258
- 17) 萩中奈穂美(2021)「『語彙学習力』育成のための実践的研究－表現学習における語彙指導の意義と方法－」『国語科教育』第89集、全国大学国語教育学会、p.12-19
- 18) 萩中奈穂美(2022)「語彙学習力を育成する学習指導過程の開発」『国語科教育』第92集、全国大学国語教育学会、p.50-58
- 19) 塚田泰彦(2005)「学習者の側から発想する語彙拡充の方法」『月刊国語教育研究』No.304、日本国語教育学会、p.4-9
- 20) 速水敏彦(2019)『内発的動機づけと自発的動機づけ－教育心理学の神話を問い直す』金子書房

Research on junior high school vocabulary learning that leads to the development Of expressive skills

Keiko EGUCHI

Department of Psychology and Culture, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University 1-1
Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

In this study, we examined the effectiveness of vocabulary learning that leads to the development of expressive skills, based on the results obtained in practice with third-year junior high school students. There are two strategies used. The first is to learn about vocabulary in order to use appropriate words, and use what you have learned and vocabulary cards to solve problems in expression. The second is to place reflective activities about one's own vocabulary and vocabulary use before and after vocabulary learning. We examined how the teaching process based on these strategies worked, and what kinds of learners' awareness of the skills necessary for vocabulary learning increased, based on self-evaluation and reflections at each stage. The results showed that learners were able to gain awareness about finding, increasing, and using vocabulary, and were able to increase their self-awareness regarding vocabulary and vocabulary use. It was also confirmed that awareness of the task of selecting appropriate words is important for vocabulary development. However, since these results are the results of one practice, it is necessary to consider them through the accumulation of practical research in order to generalize them.

Keywords: vocabulary learning, developing expressiveness, learning guidance process, junior high school